

司式:千住由美子
奏楽:堀口 恵美

前奏:「我に來たれと神のみ子は語りたもう」(D. ブクステフーデ)

招詞:真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。(ヨハ16:13a)

讃美歌:16「われらの主こそは」

交読詩編 119. 89-96 (ラメド)

- 89 主よ、とこしえに/御言葉は天に確立しています。
- 90 あなたへの信仰は代々に続き/あなたが固く立てられた地は堪えます。
- 91 この日に至るまで/あなたの裁きにつき従って来た人々は/すべてあなたの僕です。
- 92 あなたの律法を楽しみとしていなければ/この苦しみにわたしは滅びていたことでしょう。
- 93 わたしはあなたの命令をとこしえに忘れません/それによって命を得させてくださったのですから。
- 94 わたしはあなたのもの。どうかお救いください。あなたの命令をわたしは尋ね求めます。
- 95 神に逆らう者はわたしを滅ぼそうと望んでいます。わたしはあなたのために英知を得ます。
- 96 何事にも終りと果てがあるのをわたしは見ます。広大なのはあなたの戒めです。

朗読聖書①イザヤ書 11. 1-5 《メシアに宿る霊》

◆平和の王

- 01 エッサイからひとつの芽が萌えいで/その根からひとつの若枝が育ち
- 02 その上に主の霊がとどまる。知恵と識別の霊/思慮と勇気の霊/主を知り、畏れ敬う霊。
- 03 彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。目に見えるところによって裁きを行わず/耳にするところによって弁護することはない。
- 04 弱い人のために正当な裁きを行い/この地の貧しい人を公平に弁護する。その口の鞭をもって地を打ち/唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。
- 05 正義をその腰の帯とし/真実をその身に帯びる。

朗読聖書②ローマの信徒への手紙 8. 1-11

- 01 従って、今や、キリスト・イエスに結ばれている者は、罪に定められることはありません。
- 02 キリスト・イエスによって命をもらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。
- 03 肉の弱さのために律法がなすえなかったことを、神はしてくださったのです。つまり、罪を取り除くために御子を罪深い肉と同じ姿でこの世に送り、その肉において罪を罪として処断されたのです。
- 04 それは、肉ではなく霊に従って歩むわたしたちの内に、律法の要求が満たされるためでした。
- 05 肉に従って歩む者は、肉に属することを考え、霊に従って歩む者は、霊に属することを考えます。
- 06 肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります。
- 07 なぜなら、肉の思いに従う者は、神に敵対しており、神の律法に従っていないからです。従えないのです。
- 08 肉の支配下にある者は、神に喜ばれるはずがありません。
- 09 神の霊があなたがたの内に宿っているかぎり、あなたがたは、肉ではなく霊の支配下にいます。キリストの霊を持たない者は、キリストに属していません。
- 10 キリストがあなたがたの内にいらっしゃるならば、体は罪によって死んでいても、“霊”は義によって命となっています。

11 もし、イエスを死者の中から復活させた方の霊が、あなたがたの内に宿っているなら、キリストを死者の中から復活させた方は、あなたがたの内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体をも生かしてくださるでしょう。

祈祷

天地万物を創造し、初めから終わりの時まで私たちを養い、導き、お守りくださる神さま。今日、聖霊降臨節第4主日に、新しい主の日として私たち一人ひとりの名を呼んで御下に集め、ここで、またオンラインで礼拝をお献げできます喜びを感謝いたします。

神さま、過ぐる日々を思い起こせば、私たちがあなたを全く忘れていた時も、気づかずに罪の中にいる時も、愛において私たちを覚え、いつも共にいてくださいました。主イエス・キリストの十字架がなければ、私たちは生きることができません。私たちが十字架と復活の喜びを深く受け止め、喜んで与えられた命を生きることができるようにと祈ります。

今日は『子供の日、花の日』であることを覚え、また難民の日、LGBTを覚える時として祈ります。世界中の子供たちと、その子供たちを育てているご家族が等しく守られ、子供たちが子供時代を子供らしく安心して過ごせる当たり前の日常を求め祈ります。また私たちの自己中心と愛のなさが引き起こす無理解や無関心、差別、暴力の中の恐怖、苦難の中で生きざるを得ない人々がこの同じ空の下に、またすぐ隣にいます。弱い人のために正当な審きを行い、貧しい人を公平に弁護される、そのような主イエス・キリストに連なる者の群れとして、私たちが心から悔い改め、世界の平和を祈り、あなたから託された務めを果たし、愛を持って連帯して共に支え合う者となれますように、どうか私たちを強めてください。そのために世界や日本の教会が、三位一体の主なる神が現臨する教会として、この主日も真実の礼拝が献げられますようにお導きください。

また、この礼拝を共にできない方々のことを覚えて祈ります。老い、病や痛み、疲れ切っておられる方、介護や看護でその場所を離れられない方、深い悲しみ、孤独や虚しさの中で動くこともできない方もあると思います。礼拝に集えないそのような方々の声をあなたが聞き上げ、癒し、特にお支えください。

今日、講壇で御言葉を取次いでくださる笠原先生を感謝いたします。神さま、どうぞ、笠原先生に聖霊の力を豊かに注いでください。その御言葉と福音の説き明かしを私たちがしっかりと聞き取ることができるよう、この礼拝を最後まで御手の内に置いてください。

主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:344「聖霊の神、きよき愛よ」

説教 「与えられている聖霊」

笠原義久

教会の一年は主の御降誕を待ち望むこの待降節から始まります。私たちが今置かれている聖霊降臨節は、これからおよそ半年、待降節までの長い期間続くことになります。司式者によってお読みいただいた今朝の聖書箇所、『ローマの信徒への手紙』8章は、主イエス・キリストにあつて、現在と将来にわたって私たちを命とする神の聖霊への褒めたえの歌、賛歌であります。

しかし“聖霊とは一体この何であるのか”、“何か”というより、“どのような方であるのか”、私たちの教会が、『主の聖晩餐』の時、『使徒信条』と交互に告白している『ニカイア・コンスタンティノポリス信条』、その『聖霊』の項は次のようにあります。

また聖霊を信じます。

聖霊は主、いのちの与え主であり、

父と子から出て、父と子と共に礼拝され、共に栄光を着せられます。そして預言者によって語られました。

これが、『ニカイア・コンスタンティノポリス信条』の『聖霊』の項です。

それではこの聖霊についてここで告白されていることはこのどのようなことでありましょうか？

第一は聖霊の信仰です。“聖霊を信じる”とは、“聖霊である神が教会に常に臨み働いていることを確信する”ことです。父と子が働いている時にはいつも聖霊もまたそこに居る。神によって被造物全体とその上に注がれる神の祝福はすべて御子を通して、聖霊によって父から来る。そして世界が本来あるべき姿、即ち、“賛美の献げ物、世界が神への賛美の献げ物となって父に栄光が帰せられる、父が栄光を受けるのは聖霊によってであり、御子を通してである”、この事を信じるのが“聖霊の信仰”であります。“また聖霊を信じます。”、この告白、これは今申し上げたようなことを信じるということ、これが、言われている“聖霊の信仰”であります。

第二は“聖霊が主”と告白されていることです。そのことによって教会は、聖霊が神であることを受け入れ、全被造物と歴史に対する聖霊の支配を承認します。この聖霊の支配は残忍な力や抑圧的な権力による、あるいは専制的な操作による支配ではありません。そうではなくて、そのような抑圧的であったり専制的であったりするそういう勢力や支配からすべての被造物を解放し、今日の個所のすぐ後に続く 21 節の言葉、「神の子たちの栄光に輝く自由」を与える支配です。人が悪に抵抗し、それに打ち勝つことを可能にしてくれる力のことであります。聖霊が主と告白されていることはそのようなことであります。

第三は、“聖霊は命の与え主”と告白されていることです。“命の与え主”、聖霊はキリストにある新しい命を与えてくれます。聖霊によって人間は新しい創造の初穂として新たに生まれます。そして他の被造物と共に新しい天と新しい地に与えることを待ち望んで呻いています。さらに聖霊は、神の民である私たち教会の信仰を起し、支えてくれます。そして溢れるばかりの賜物を注ぎ出してくれます。これらの溢れるばかりの賜物は、全て一人ひとり、全体の益のために、教会の肢々一人ひとりと与えられていますけれども、それが本当に正しく用いられるとき、一つの体である教会の一致へと向かわせてくれます。そのように聖霊は神の民である私たちの教会の信仰を起し、そして一つの体である教会の一致へと向かわせてくれる、それが聖霊です。

ニカイア信条により語られる第四のこと、それは“聖霊が預言者によって語られた”ということです。最初期の頃の教会、初代教会は、“イエスが旧約聖書の預言の成就であり、そのイエスの上に聖霊が明らかな仕方で留まる。そういう油注がれた預言者であるのだ。”と信じていました。その復活の主によって、父から遣わされた霊の働きを通して預言の賜物は私たち教会に手渡されました。“聖霊が預言者によって語られた”ということはそういうことを意味していると思います。

ニカイア信条で告白されている聖霊のことについてお話してきましたが、今日の聖書箇所である『ローマの信徒の手紙』8 章、ここで私たちが聞くようにと求められている一番大きな主題は一体何でしょうか？

一言で言えば、それは“私たちの上に、教会の上に聖霊が確かに与えられているのだ”という真実であります。それは私たちが私たちの体をもって、文字通り全身を耳のようにして聞き取られなければならないという真実であります。

“私たちの上に、教会の一人ひとりの上に聖霊が与えられている”、そのように申しましたが、この“聖霊が与えられている”という事実を私たちは、“地上にある教会の何処に”、また、“この私たちの教会の何処に見出し、認めることができるのでしょうか？”

人間的に見た教会のこの実情は、概して言うならば、“聖霊の不在”ということではないでしょうか。“聖霊がおられない”、“地上にある教会がどんなに破れ多くあるか”、“どんなに真実を欠き、どんなに惨めな姿・形であるか”、そのことはある意味で私たちが骨身に染みて分かっているところです。私たちは確かに弱いものであります。しかしその弱さが、神の力が現れる場となるというよりは、更なる弱さと混乱さえも引き起こしてしまう、それが人間的に見た教会の偽らざる実情ではないでしょうか？

一体、教会を命あるものとなし、私たち信仰者の賜物を生かし、神を命と力としてみたらすはずの聖霊は一体どうなってしまったのか？ そういう問が声になるかならないかは別にして、今日の教会の中に打ち消し難くあると思います。もちろん日毎の生活の中で、私自身聖霊の働きとしか言いようのない出来事に出会うことが全くないわけではありません。しかし概して言うならば、聖霊不在の思いの中で聖霊を求める祈りを自らの事、教会の事として驚くべきを得ない、それが私たちの実情ではないでしょうか。そのような中で、今日の聖書所は、強い励ましをもってたちに迫ってきます。今教会が、また私たち夫々が聞くよう促され求められていることは、“聖霊は与えられている”、この事実への承認であり、確かな信頼ではないでしょうか。

“聖霊はキリストの霊として、キリストそのお方として、私たちの内に住んでおられる”ということ。それはまた“キリストを復活させた方の霊として、復活の力、復活の保証として私たちに与えられているのだ”、ということでもあります。そして今申し上げた“この事実への証人と信頼の言い表しから、私たちにとっての全てが始まる”と言っても過言ではないと思います。

聖霊不在の思い、“聖霊がいない”、“内に住んでいない”、そういう聖霊不在の思い、“聖霊が与えられているという思いから遥かに遠い”私たちはあるけれども、しかし、ということが、そこから興って来る。“事実への証人と信頼の言い表しから、私たちにとっての全てが始まる”。なぜならば、私たちは曲がりなりにも、“イエスは主である”と、そのように言い得ています。そしてそれはパウロが言うように“聖霊によらなければ誰も言うことのできない(1コリ 12:3)”言葉です。“イエスは主である”、言葉も思いも足りないものではあるけれど、私たちは主イエスを、主イエスによる神を“アッパ、父よ”と、そのように呼び得ているのではないのでしょうか。

パウロは言います。

神の霊があなた方の内に宿っている。キリストの霊があなた方の内におられる。イエスを死者の中から復活させた方の霊があなた方の内に宿っている。(8:11)

キリスト・イエスによる神の霊、聖霊は確かに与えられている。この命の事実に対して感謝と喜びの声を高く挙げようではないか。その事実を互いに語り合い、この事実によって互いに励まし合おうではないか。聖書は私たちにそのように呼びかけているのではないのでしょうか。

“私たちに確かに与えられている聖霊”と、そのように申しました。そのことで私たちが聞き逃してはならないもう一つのことは“聖霊の支配”ということです。“聖霊は神の霊、キリストの霊として私たち夫々の内に宿ると同時に、キリストの霊として全てを支配している”ということです。“霊が私たちのうちに宿る”ということ、“霊が私たちの内に住む”、このことは極めて個別的な命のことでもあります。“一人ひとりをその者に相応しく生かし、夫々個別との賜物を与えてこれを生かし、聖め、夫々に相応しくキリストを言い表わさせ、キリストを信じ、これに従う道へと出で立たせてくれる”、“霊が私たちの内に宿る”ということ、“内に宿る霊”というのは、そのように神による子を個とする命とそして力である。私たちが夫々与えられている個別の賜物を用いてこれを生かし、聖め、夫々に相応しくキリストを言い表わさせ、キリストを信じ、これに従う道へと出で立たせてくれる、“内に宿る霊”とは、“神による子を個とする命と力である”と、そのように言ってもよいと思います。

しかし、もう一方で、“霊によるキリストの支配”ということがあります。人間に止まらず被造物全てに及び支配、この支配とは先ほどニカイア信条のところでお話したように、抑圧的専制的な支配ということではありません。また単なる総括的な、つまり別々のものを纏め合わせ、ひっくるめて機械的に丸ご支配するという支配ではありません。“霊による支配”というのは、そういう抑圧的専制的な、あるいはひっくるめて支配するというような機械的な支配ではありません。“霊による支配”とは被造物個々の上に、支配というよりむしろ解放として、自由として働く支配ということだと思います。

今朝の聖書から聞くべきもう一つのこと、それは最後の 11 節にあるように、“与えられている聖霊はやがて私たちが新しい体に復活させていただくその力であり、その保証である”ということです。これは本当に心を打つ言葉です。なぜなら私たちが“身体からだのよみがえり、永久とこしえの生命いのちを信ず”と告白しつつ、そのことが私たちの信仰における希望の本質的なことであるということ、ほとんど私たちは思っていないのではないのでしょうか。少なくとも私自身、自分のこととして、そう言わざるを得ません。将来私たちに顕されるはずの栄光、あるいは神の子とされること、つまり体の贖われること、新しい体に復活すること、そのことを自分は本当に待ち望んでいるのか、“どうですか”と問われるならば、私は“ただただ反省の思いの強い”、これが私の実情です。

しかし聖書に聞く時、私たちに与えられている聖霊が、霊の初穂であり、霊の保証であることを知ります。そして聖霊が充ち溢れる時、あなたの方内に宿っているその霊によって、あなたがたの死ぬはずの体を、新しい体として生かしてください。その時、神の子供たちの栄光に輝く自由に与れる時、将来私たちに表されるはずの栄光の時、即ちキリストの日まで、その時までには、“私たちはその時に向けてなお呻きながらあるほかない”ということです。

確かにそうだと思います。私たちは幻想を抱いてはならないし、また呻くことを避けようと小細工をしても、それは愚かしいことだと思います。けれども初穂であっても私たちは霊を与えられ、霊が内に宿ってくださっている。そして私たちはその霊の支配下にいる。だから“イエスは主である”と告白し続けることができるし、苦難を誇ることができるし、また宣教の愚かさに曲がりなりとも命をかけることができるし、自らの呻き、被造物の呻きの中にも希望を聞き取ること、そのことが私たちにできるのではないのでしょうか。

これから長く続くこの聖霊降臨節、その間、私たちは本当に聖霊によって“御国を来たらさせ給え”と、そのように祈りつつ、与えられている聖霊を喜び感謝しつつ、自らのこと、教会のこと、また私たちのこの国のこと、世界のことを見直していきたいと、そのように切に願うものであります。

祈祷を献げます。

主なる神さま、あなたが私たち全てに聖霊を与え、しかも何度も新しく与えてくださるようお願いします。そして私たちが、あなたに向けられた希望の中に、細やかであっても大切な一步を思い切って踏み出す力を与えてくださいますよう祈り求めます。主キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌:361「この世はみな」

献金・感謝(有原弥子)・主の祈り

ご在天の父なる神さま、聖霊降臨節第四主日の今日、主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたことを感謝いたします。

本日は与えられている聖霊について笠原先生より豊かな御言葉のお取り次ぎをいただき感謝いたします。聖霊が与えられている実感から遠くても、私たち

の上に、教会の上に、聖霊が確かに与えられているという命の事実に対して感謝と喜びを語り合い、励まし合いながら、あなたの御国を待ち望むことができますように。私たちがこの一週間を夫々の旅路の中で御言葉を糧として歩むことができますようにお導きください。

私たちは必要なものを与えられ主の僕として生きることが赦されていることを感謝します。今、夫々が与えられた物の中から感謝と献身の徴を御前に献げます。どうぞ聖めて教会のご用のために用いてください。主が教えてくださった主の祈りを共に唱和し、新しい日々を迎えさせてください。「主の祈り」…アーメン。

讃美歌: 89「共にいてください」

派遣: 主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の親しき交わりが、永遠とこしえにあるように。アーメン。

報告: ⑤行事(子どもの日・花の日)報告と次週全体礼拝案内

後奏: 「後奏曲」(F. メンデルスゾーン)